

の参禅も、そこからの脆皮をはからうとする漱石の一断面を反映しているようである。(第四章参禅)

『門』の参禅前後の芸術的欠陥に関しては、諸氏が、漱石の健康状態、職業意識、題名の制約、『それから』の続篇を書くという束縛などをあげているが、これは宗助の悩みの本質が自己そのものにある、それに関して漱石が根本的に追求していないことから来るようである。(第五章『門』の芸術的欠陥について)

最後に、小六と坂井についてふれてみた。小六は宗助の昔を、坂井は御米との事件がなかった場合の宗助の未来を暗示しているように思われる。(第六章 小六と坂井について)

昭和四十七年十一月二十五日

△金峯山の伝説―役行者

にまつわる伝説を中心として―▽

——金峯山への憧れ——

第三回卒業 福井 るり子

金峯山は、奈良県の南部、吉野山から大峯山にかけての一連の峰つづきの総称である。古くから、この山には慰めや救いを求めて入っていく人が後を絶たなかったという。例えば『万葉集』には、

三吉野之 耳我嶺尔 時無曾 雪者落家留 間無曾 雨者零計
類 曾雪乃 時無如其雨乃 間無如 隈毛不落 念乍叔来 其
山道乎

と詠まれているし、『枕草子』や『源氏物語』からは「御嶽精進」と称する金峯登山が当時かなり一般化されていたことが窺われる。

また近年では三島由紀夫氏が、「追われたら吉野の山へ逃げよう」等と生前友人に話しておられたと聞いた。その伝統は現在も生きているのだろうか。要するに、金峯山は人々の一種の憧れの地であった。そしてその觀念からいつか一つの宗教―修験道が出来上るに至ったのである。私はこれらの金峯山の特異性が各時代の文化と結びついて作り出された伝説を卒業論文のテーマに選んでみた。まず金峯山が幸せの浄土を思わせる地であるという信念ができて「金の御嶽伝説」が作られ、更に修験道が盛んになると、その開祖、役小角をはじめ高名な験者にまつわる伝説が数多く生まれていったのである。

その中で私が最も心惹かれた「役行者と一言主神の話」を紹介したい。これは『今昔物語』他数書に載せられており、また謡曲の『葛城』としても伝え継がれている。役行者が金峯と葛城の間に石橋をかけることを葛城の守護神、一言主神に申し付けたところ、彼らは自分の姿の醜さを恥じて夜々に隠れてこの橋を作らうとした。行者にはそれが気に障り一言主を叱責するが、尚も反抗した為、行者は彼を谷底に呪縛してしまったという。

この話は役小角の威勢を示そうとする創作である。しかし宗教的な知識の乏しい私には何ともほのぼのとしたものをまず覚えてしまうのである。今、吉野山に立ってみると葛城山は間近に感じられ、私もここに橋をかけてみたくなる。幾万本の桜が雲のように咲き連なっているのを眺めるとそれはあたたかみ白い石の橋のようである。ああ私の祖先はこれを見てあの話を作ったのだらうと思うと苦笑しうなづいてあげたくなるのである。こんな思いは他の全ての伝説にも共通して言えることである。これらを思い起こすとき、庶民の

一途な信仰心や飾り気のないユーモア、幼稚な恐怖心に接したときの心が浄化されるような爽やかさが甦ってくる。それはまた、これらの宗教的伝説を少しの疑いもなく信じ、受け継いできた古代人の素朴さと純一さへの親しみであり、憧れである。

これらの伝説を通して、金峯山の清らかさと厳しさへの憧れが一層深いものになったこと、今も金峯山の神秘性への憧れは消えることなく続いていることは言うまでもない。

〈樋口一葉研究〉——日記にみる意識の流れ——

第三回卒業 保坂 ゆう子

樋口一葉は父・兄を早く失い、若い女性の身でありながら一家の柱とならなければならなかった。生活の資を得る事を目的として小説を書き始めながらいつか全力でそれにぶつかっていった。こんな一葉は世の中をどう捉え、文学を恋愛をどう考えていたのであろうか。一葉の日記は様々に評されるが、日記を中心に丹念に読み、一葉の意識の流れを社会観・文学観・恋愛観に分けて考えてみる。

第一章 一葉の教養と悩み (略)

第二章 日記について (略)

第三章 一葉の意識の流れ (要約)

第四章 一葉の人間像 (略)

社会観

早くから小説を書き、戸主として世の中に出ていった一葉は世の中をどう考えていたのであろうか。

明治二十四年ごろは決して悲観絶望ばかりで世の中をみているのではない。身分の上下も貧富の差も心掛けの違いによるものではない。心掛け次第で世の中はどのようにでもなると考え、希望も幾分か持っていたのである。だから命のある限り努力しようとするのである。このように考えていた一葉も明治二十八年になると、実際にはいくら努力しようともどうにもならないと考えるようになるのである。何事もほどほどにして、見るめ次第ではすばらしいものであるとあきらめてしまい、ついには、この世の中は仮の姿で誠のない夢のようなものであり、はかないものであるとおもうのである。貧乏人にとつては冷たく、儘ならない世の中であると考えている。

文学観

世間のきびしさを知り、すばらしいものを書きたいと願っていた一葉はどんな文学観をもって小説を書いていたのであろうか。

「真情に訴へ、真情をうつす」(m・24・11)これが一葉の日記に最初に記された文学観であり、生涯これを貫いている。一葉は小説を書く上で大事な事は、前記の他に、

完全無瑕のものをつくる (m・26・2・6)

誠の天地を見出す (m・26・2・9)

おもひの馳するまま、心の趣くままに書く (m・27・7)

世道人情をもととする (m・26・11)

愛憎好悪の念を捨てて、かくれたるを顕し、うつもれたるを照らす (m・26・11)

ことであると考えた。このように考えながら実際に書いた作品とは遊離してしまつてついに結びつくことがなかったのではないかと思ふ。これは、常に一葉は、何のために小説を書くのか、名譽のた